

よどじん

チキチン、チキチン、チキチン、コンコン。
日曜日の昼下がりに会館から響く、少しあどけない音色の祭囃子。中をのぞくと、広々とした畳の間で小学生の子ども達が真剣な顔つきで祭りの稽古に励んでいる。ここは新北野福祉会館。やさしい掛け声で子ども達に太鼓や踊りを教えているのは、

「まつりびと」

なか がわ ひろ き
中川弘樹さん

地域で育つ

今年で31歳になる弘樹さん。平日は営業のお仕事で早朝出勤、深夜帰宅の忙しい日々を過ごし、地元にいる時間はごくわずか。しかし、週末になると地域活動を支える一人の若手に変身する。

小学生の頃、父に連れられ運動会や遠足、ソフトボールとたくさんの地域行事に参加。その中でごく自然に近所のおっちゃん、おばちゃんに見守られ、成長してきた。

「どこを歩いても必ず誰かに声をかけられる。タバコを吸ったり夜中に出歩いたり、悪いことは出来なかったですよね(笑)」

しかし、中学・高校と進学するにつれて、地域活動へ関わる機会が減り、就職するとさらに、人間関係や生活環境が変化し、地元との距離が遠のいた。



「そこ、もうちょいゆっくりでいけるかっ」
個々の技術に合わせて、丁寧に指導



まつりの存在

そんな日々の暮らしの中で、年に一回、地元を満喫する日がある。

そう、お祭り。

ここ新北野地域では、古くから地元なる小路神社しょうじの祭りが続いており、名物は何といっても、だんじりの引き回し。一目見ようと、就職・結婚などで遠方に引越した人達もこの日だけは生まれ育った地域に戻るといふ。

弘樹さんもこの日ばかりは仕事も忘れ、幼なじみや近所のおっちゃんおばちゃんと祭りに没頭する。

だんじり文化の継承

祭り当日は、だんじりに乗り込んだ子ども達が太鼓や鐘を軽快なリズムで鳴



踊りの振り付け指導にも熱が入ります



年月を重ね、味わいある色合いの太鼓

守りつなげる 人がいる

